

# 研究所だより

第495号  
2026年 2月25日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015

“春よ来い 早く来い 歩きはじめた みいちゃんが  
赤い鼻緒の じょじょはいて おんもへ出たいと 待っている”



『春よ来い』 童謡 1921年(大正10年)

「梅一輪いちりんほどの暖かさ」と言いますように、梅の花も咲きほころび、木々では小鳥がさえずり、少しずつ春を感じさせてくれるようになりました。

春の訪れとともに引き続き基本的な感染防止対策「マスク(咳エチケット)、手洗い、うがい、3密回避、体調管理」に留意しながら過ごしましょう。

指導と評価 令和8年/3月号(抜粋)

～通常学級の特別支援教育～

## インクルーシブ型に向かう学校とは

ふかざわ かずひこ  
深沢 和彦 (神奈川県立保健福祉大学教授)

### 1 学校現場の現実

学校現場では、そもそもアイランド型学級にも及ばない学級タイプが半分以上出現しているという現実がある(表)。これら多くの学級にとっては、いまの現実からインクルージョンの理想に向かう道筋が見えないという不安があるに違いない。

### 2 分岐点はどこにあるのか

私の研究では、アイランド型からインクルーシブ型に移行する事例はほとんどない。登山に例えるならめざそうとする山の頂が異なるからである。インクルーシブ型学級にいたる教師は、いまの学級がどのような状態であったとしても、管理意識に比べて認知的共感性を高く発揮し、子どもたちの相互作用の活性化と自律性を育んでいこうとする傾向が認められる。一方、アイランド型にいたる教師は、いまの学級がどのような状態であったとしても、認知的共感性に比べて管理意識を高く発揮し、問題が起こらないように子どもたちの相互作用を抑制しようとする傾向が認められる。つまり、インクルーシブ型に向かうかどうかは、教師の指導意識しだいなのである。

### 3 だからこそビジョン共有が重要

障害をどう捉えるかを「障害観」と言い、医学・社会・人権の三つのモデルがある。医学モデルは、障害によって生み出された障壁は個人の責任であり、治療やリハビリによって克服していかなければならないという考え方。社会モデルは、障害を生んでいるのは、社会の環境に問題があるという考え方。障害の人権モデルは、無力、無益な者として否定する周囲の捉え方こそ障壁であるとし、障害を人間の多様性の一部として評価し、人権の尊重と社会への参加貢献を保証していく考え方である。

支援対象児の環境として「良好な学級集団」が重要であるという考え方は、障害の社会モデルの考え方と符合する。この点について、学校全体で教師の障害観をすり合わせ、「学校全体で何をめざしていくか」を共通理解することは、認知的共感性を高める前提となる。

そもそも教師が社会モデル・人権モデルの障害観をもたなければ、インクルーシブ教育を成功させるために学級集団づくりをしていこうという発想は生まれてこない。また、個を生かすための集団づくりではなく、集団の効率が個に優先されることになってしまう。

特別支援教育において「校長のリーダーシップが重要である」と言われるのは、特にこうしたビジョンの共有においてである。インクルーシブ型学級が同じ学校に偏って出現する傾向があるのも、インクルージョンの理念と目標を学校全体で共有しているからである。

### 4 最初から自律性支援を目標に

Q-Uで理想とされる「自治的な学級集団」とは、学級のルールが児童に内在化され、児童の活動が温和な雰囲気の中で展開され、学級の問題を自分たちで解決できる集団である。私が観察した臨床像から言えば、インクルーシブ型学級と自治的学級は同じ学級状態を指している。すなわち、学級内にルールとリレーションが確立しており、さらに自分たちで話し合い行動できる力(自律性)を子どもたちが有している状態である。(※Q-U:学級集団をアセスメントし、より適切な支援をするための補助ツール、心理テスト)

そのためには、ルールとリレーションの確立の過程が教師主導であってはならない。例えば、ゆるみのある学級状態にあるとき、多くの教師は厳しい口調でルールを守るよう子どもを引き締めようとするかもしれないが、インクルーシブ型にいたる教師は「この学級の何が問題かな?」「どうすればいいと思う?」と根気よく問いかける。学級の進路は子どもたちに委ね、少数派の意見も聞いたうえで合意形成と自己決定がなされるように仕組むのである。そのため、学級内では子どもたちが話し合っている姿がよく見られる。

インクルーシブ型学級をつくる教師は、教師が介入して手っ取り早く解決することを「子どもの成長の機会を奪う」と捉え、「見栄えよりも自分たちでできたこと」や「誰かを置き去りにして十歩進むより、全員で三歩進むこと」に価値を置き、学級という社会を形成していこうとする当事者意識の芽生え(自律性)を学級づくりの初期から支援していく。

### 5 遠回りに見えても

インクルーシブ型学級にいたる道筋は一筋縄ではいかない。高橋は、Q-Uを活用したインクルーシブ教育推進の取組の中で、学校生活の満足度や意欲、ソーシャルスキルの使用等についてのアセスメントに加え、深沢が示した「インクルーシブエリア」(図)から外れた位置にある児童の検討を行い、エリア外に位置する児童と他児童をつなぐ「架け橋対応」を意識した取組により児童どうしの相互作用を活性化するための取組を複合的に実施した。

例えば学年会議では、①座席位置やグループ編成、活動の流れを視覚的に示す等の学びに向かう環境調整、②付箋紙やICTを使用し個の考えの全体共有・整理等の学びの共有、③様々な考え・方法を示し個々によさがあることの理解を図る多様性の理解の三つの視点からのアプローチを学級ごとに検討・実施した。

結果、児童どうしの相互作用は、プラスの変化ばかりではなくトラブルの生起によってマイナスに変化した学級も出てきた。しかし、トラブルにあわてて管理を強めればインクルーシブ型学級にはいたらない。インクルーシブエリア外に位置する児童と他児童とのかかわり方を見直し、①学びに向かう環境調整、②学びの共有、③多様性の理解の三点について再調整する必要がある。活動後に「一緒に活動してよかった」と思える活動を仕組むことで、子どもたちの相互作用はさらに活性化していく。

真正のインクルーシブ学級は、一朝一夕につくられるものではない。全教職員と全児童が小学校6年間かけてつくるものである。そのプロセスの中で、共生社会の形成に必要な資質・能力が醸成されるのである。

表 学級タイプの出現数・率

学級タイプ	出現数	率%
インクルーシブ型	30	26.5
アイランド型	24	21.2
かたさ型	22	19.5
ゆるみ型	13	11.5
不安定型	20	17.7
拡散型	2	1.8
崩壊型	2	1.8

公立小学校4・5・6年生の113学級を調査した結果(深沢・河村、2023)

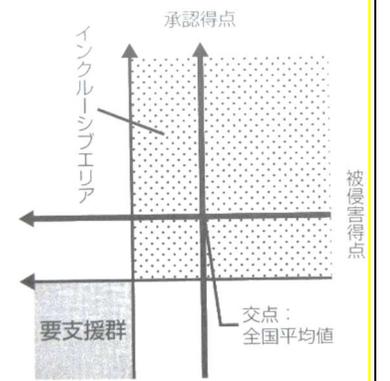


図 インクルーシブエリア  
深沢(2021)

## 第6回教研推進委員会

2月12日(木)に第6回教研推進委員会を開催し、今年度の教研活動の総括と来年度に向けての課題・申し送り事項並びに来年度の教研活動(組織・日程)について協議しました。

### 1. 2025年度総括・申し送り事項(抜粋)

#### ①年間の取組の反省

##### ア. 教研推進委員会(小・中)

- ・推進委員として各部会の取組や今後の課題について協議することができた。
- ・各部会の部長も参加しての推進委員会の開催がよかった。

##### イ. 教研活動(小・中)

- ・新しい組織の中での活動となったが、各校の取組について交流する機会が持てよかった。
- ・部会など変わったこともあり、まだ手探りの部分があるが、これから研究を深めていければと思う。
- ・教研の回数的にも目的や目標が定めにくく、活動の方向性を決めるのが難しい。

#### ②来年度に向けての申し送り事項等

##### ア. 教研推進委員会(小・中)

- ・来年度も部長も参加の推進委員会を開催したらいいと思う。

##### イ. 教研活動(小・中)

- ・来年度も、今年度実施の部会で活動できたらいいと思う。
- ・色々な講師のお話を聞いて勉強できればと思う。

### 2. 2026年度第76次土佐清水市教育研究集会(市教研)について

来年度も児童数の減少により学校の統廃合が進みますが、上記総括・申し送り事項を基に協議した結果、来年度も引き続き6部会で実施をすることになりました。各部会、今年度の実績を基に研究内容(共通課題・取り扱う教科・公開授業・実践共有・講師招聘等)を決めていただければと思います。

#### (1)部会構成

- |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
| ①【探究的な学び部会】 | ②【ふるさと教育部会】 | ③【なかまづくり部会】 |
| ④【教育DX部会】   | ⑤【養護部会】     | ⑥【事務部会】     |

#### (2)2026年度市教の日程

##### ①組織教研

期日:4月28日(火) 午後開催(全体会・高校の実践発表、部会研修)

会場:清水高等学校・清水中学校

##### ②一日教研

期日:8月 5日(水) 午前:全体会・講話(講師招聘) 午後:部会研修

会場:清水高等学校・清水中学校

##### ③半日教研

期日:11月 4日(水) 午後開催(13:45~)

会場:各部会各会場

##### ④総括教研(各部会で計画)

\*①②③④の日程、内容の詳細についてはその都度御案内します。

### 3. 2026年度第1回教研推進委員会について

期日:4月14日(火)16:00

会場:教育センター

## 第2回学力向上検討委員会

2月 3日(火)に第2回学力向上検討委員会が開催されました。

はじめに指導主事より、令和7年度高知県学力定着状況調査(「小4:国・算」、「小5:国・算・理」、「中1、2:国・社・数・理・英」)の自校採点結果を基に、市全体(小中学校別)を「問題の内容」「出題のねらい」「学習指導要領との関連・評価の観点・問題形式」「数値(正答率)土佐清水市・西部管内」の項目ごとに報告がありました。

これまで先生方が力を入れて取り組んでこられた成果が表れ、各校・各学年において向上が見られている場面が多くありました。(授業改善、学習の土台作り、無回答率の低下など)

一方課題も確認されました。特に「書く力」については、小学校・中学校共通の課題であることが確認されました。また、考えを書くための前提として、問題の意図を正しく読み取る力や「なぜ」「何」に着目して、考えの根拠を明確にしながら自分の意見を述べる力の必要性も示されました。日常の授業の中で、意図的に書く活動の時間を確保していくことが有効ではないか、という意見も出されました。

今後の取組としては、「学年の実態に合った取組ができていたか、何が課題であったか」など再度分析し授業改善に生かしながら、令和8年度4月に実施される全国学力・学習状況調査に向けて計画的に取り組んでいただきたいと思います。

## ◇書籍紹介◇

新しい本を購入しました。読んでみませんか。

書籍の貸出も行っていますので、ぜひ教育研究所へお越しください。

### ①「不登校を見つめ直す32の問い 安心して通える学校って？」

著者:森 万喜子 千葉 孝司 (学事出版)

学校、地域、家庭では、どんな場所だろう、、、。不登校を見つめ直す32の問いを通して、これからの学校、地域のあり方、大人のあり方が見えてきます。学校の先生だけでなく、不登校の子どもの保護者、地域社会で活動されている方々に、ぜひ読んでほしい一冊です。

### ②「不登校なんて怖くない！ 親の心がすーっと軽くなる本」

著者:ラン (すばる舎)

子どもが不登校になると、親の心は不安と迷いの中で、揺れ続けます。本書は、その苦しさに寄り添いながら、「わが子が再び動き出すために、親ができることを」確かな方法として示しています。「傾聴」「心の代弁」「視点を変える声かけ」など、今日から使えて、子どもに変化が生まれるスキルをやさしく学べます。ぜひ読んでほしい一冊です。

